

天草方言で読む【更級日記】

鶴田 功〈訳文〉

平安中期 作者は菅原孝標たかすえの娘（菅原道真の子孫）

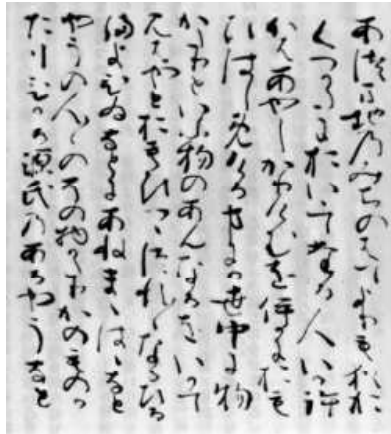
更級日記 〈原文〉

東路あづましのはて

東路あづましの道のはてよりも、なほ奥つかたに生ひ出でたる人、



いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひ始めけることにか、世の中に物語といふものよしいのあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなるひるま、宵居などに、姉・継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを



聞くに、いとどゆかしさまされど、わが思ふままに、そらにいかでかおぼえ語らむ。いみじく心もとなきままに、等身に薬師仏を造りて、手洗ひなどして、人ままははにみそかに入りつつ、「京にとく上げたまひて、物語の多く候さぶらなる、あるかぎり見せたまへ」と、身を捨てて、額ぬかをつき祈り申すほどに、十三になる年、上らむとて、九月三日門出して、いまたちといふところに移る。年ごろ遊びなれつる所を、あらはに毀ちちらして立ちさわぎて、日の入際のいとすごく霧わたりたるに、車に乗るとてうち見やりたれば、ひとまには参りつゝ額をつきし、薬師佛の立ち給へるを、見捨て奉るかなしくて、人知れずうち泣かれぬ。

〈意訳〉

東路あづましのはて

都から東国への道の果てにあるちゅう常陸の国よりもっと奥の上総かすさの国で育った私は、さぞや田舎臭か小娘じゃったことが知れん。

そん癖、どいまたそがん気ば起こしたとじゃいろ。世にある色々な物語ちゅうもんば見てみたかちゅて、思い詰めたっです。

することもなく、退屈な屋間じゃい夜なんかに話し合う時、姉や継母があれこれ物語ば話題にしたり、また、光源氏の君の有様など、話すとば聞くに付けても、いよいよ物語ば知りたかと思う心は募る一方じゃった。

ばって、私にや家の人たちんごて本物も見いでにゃ思い通りに話すことなんか出来るはずもなか。

そりがなんさまじれったかせんか、わーが身の丈程ん薬師仏の像ば造って、手ば洗い清め、家の者が見とらん時、こっそりそん部屋にひゃって「早う京に上らせて、物語ンよんにゆあつとば、あるしこみんな見せつ下っせ」ちゅて、もう夢中になって、額は擦りつけてお祈りしよりますと。

そがんこっしとる間に、十三になった年、いよいよ京都に上ろうと言うこてなって、九月三日に門出して、イマタチという所に移りました。

年頃遊びなれとった場所ば、表から中が丸見えになるごてうっ壊しつらきゃーて、人々が、がやがや騒ぎ立てとらす。

物寂しゅう夕暮れが辺り一面に立ちこめとる頃、門出しました。車に乗ろうとして、住み慣れた部家の方ば振り返ってじっと見たりゃ、今まで人見とらん時に行って拝んでいた薬師仏がお立ちになってとらすのをそのままお見捨てすることが悲しゅうして、思わず泣けてきて、心ン中で拝んだとヨ。

〈原文〉

門出したる所は、巡りなどもなくて、かりそめの茅屋かやの、部しとみなどもなし。簾すだれかけ、幕など引きたり。南ははるかに野の方見やらる。東・西は海近くて、いとおもしろし。夕霧立ち渡りて、いみじうをかしければ、朝寝あさいなどもせず、かたがた見つつ、ここを立ちなむこともあはれに悲しきに、同じ月の十五日、雨かきくらし降るに、境を出でて、下総しもふさの国のいかたといふ所に泊まりぬ。庵いおなども浮きぬばかりに雨降りなどすれば、恐ろしくていも寝られず。野中に丘だちたる所に、ただ木ぞ三つ立てる。その日は雨にぬれたるものども干し、国に立ち遅れたる人々待つとて、そこに日を暮らしつ。

〈意識〉

門出してから移った所は、周囲に垣もなかほんの間に合わせの茅葺き家で、簾ば掛け幕どん引き巡らしてあった。

南は遠か所まで一面に野原ん見渡さる。東と西は海が近こうして、そりゃよか眺めです。夕霧が立ちこめてなかなか趣があるので、朝寝もせず、方々の景色ば眺め続けとりました。

そこば立ち去ったも、名残惜しゅうして、そん月の十五日、空が真っ黒うなって雨ン降る日に国境ば離れて、下総の国のイカタちゅうところに泊まりました。

仮の小屋なども浮き上がるぐりゃ、えっと降って、恐ろしゅうして寝るところじゃかった。

野中の丘んごたっ所に木が3本立っとるだけの寂しか所で、遅れて来る国の人たちば待つてそこで一日暮らしました。

〈原文〉

【竹芝寺】

(一)

今は武蔵の国になりぬ。ことにをかしき所も見えず。浜も砂子いさご白くなどもなく、こひぢのやうにて、柴お生ふと聞く野も、葦・荻のみ高く生ひて、馬に乗りて弓持たる末見えぬまで、高く生ひ茂りて、中を分け行くに、竹芝といふ寺あり。はるかに、ははさうなどいふ所の、廊の跡の礎いしずえなどあり。

いかなる所ぞと問へば、「これは、いにしへ竹芝といふ坂なり。国の人のあるけるを、火たき屋の火たく衛士えじにさし奉りたりけるに、御前の庭を掃くとて、『などや苦しき目を見るらむ。わが国に七つ三つ造り据ゑたる酒壺に、さし渡したるひたえのひさごの、

南風吹けば北になびき、北風吹けば南になびき、西吹けば東になびき、東吹けば西になびくを見で、かくてあるよ』と、ひとりごち、つぶやきけるを、その時、帝の御女いみじうかしづかれたまふ、ただひとり御簾のきはに立ちいでたまひて、柱によりかかりて御覧するに、このをのこのかくひとりごつを、いとあはれに、いかなるひさごの、いかなびくらむと、いみじうゆかしくおぼされければ、御簾を押し上げて、『あのをのこ、こち寄れ』と召しければ、かしこまりて高欄のつらにまゐりたりければ、『言ひつること、いま一返りわれに言ひて聞かせよ』と仰せられければ、酒壺のことを、いま一返り申しければ、『われ率て行きて見せよ。さ言ふやうあり』と仰せられければ、かしこく恐ろしと思ひけれど、さるべきにやありけむ、負ひ奉りて下るに、論なく人追ひて来らむと思ひて、その夜、勢多の橋のもとにこの宮を据ゑ奉りて、勢多の橋を一問ばかりこぼちて、それを飛び越えて、この宮をかき負ひ奉りて、七日七夜といふに、武蔵の国に行き着きにけり。

〈意識〉

今はもう武蔵の国になった。とくに景色のよか所も見えん。浜辺も砂が白うして美しくもなか泥んごて、紫草が生えると聞く武蔵野も葦や荻だけが高く生え、馬に乗った人ん弓の先が見えんごて、そんな中ば分けて行くと、竹芝寺という寺があった。はるか向こうに、「ははさう」ち言う所の、廊の跡の土台石などがある。

どういう所じゃいろと尋ねると、「ここは昔、竹芝といった坂です。土地の者がいたのを、国司が宮中の火たき屋の火ばたく衛土として差し出したっですばって、その男が御殿の前の庭ば掃きながら、『どうしてこがん辛か目ば見っとだろ。私の国で七つ三つと造って置いてある酒壺に、さしかけて浮かべたひたえのひさごが、南風が吹けば北になびき、北風が吹けば南になびき、西風が吹けば東になびき、東風が吹けば西になびきすつとば見ることもなく、こうしとつとよ』と独り言ばいい、つぶやいとりました。その時、帝の姫宮でたいそう大切に育てられていたお方が、ただ一人で御簾のそばに出られて、柱に寄りかかって辺りばご覧になつたらしたりや、こん男がこがん独り言ばいうのば耳にされ、とてもしみじみと感じられたけん、どがんひさごがどがんふうになびくとじゃいろと、たいそうご覧になりたく思われ、御簾をかき上げて、『そこの男、こちらへおいで』とお呼びになりました。男はつつしんで欄干のそばに参りましてや、『先ほど言うたことば今一度私に言うて聞かせてくれ』とおっしゃったけん、酒壺のことばもう一度申し上げたところ、『私を連れて行って、それを見せておくれ。こんなことを言うのはそう言うわけがあつたらけん』とおっしゃった。男はもったいなく、恐ろしいことと思つたばって、そうなるはずの因縁だったのか、男は姫宮を背負うて武蔵の国へ下って行きましたが、必ず人が追ってくるだろうと思ひ、その夜は勢多の橋のもとに姫宮ばお座らせ申し上げ、勢多の橋ば柱一間分ほどこわして、それば飛び越え、姫宮ば背負い申して、七日七晩めにや武蔵の国に行き着いたのです。

〈原文〉

(二)

帝、后、御子^{みこ}失^ませたまひぬとおぼし惑^{まど}ひ、求めたまふに、武蔵の国の衛士^{えいじ}のをのこなむ、いと香ばしきものを首に引き掛けて飛ぶやうに逃げけると申しいでて、こののをのこを尋ぬるになかりけり。論なくもとの国にこそ行くらめと、公^{おおやけ}より使ひ下りて追ふに、勢多の橋こぼれて、え行きやらず、三月といふに武蔵の国に行き着きて、こののをのこを尋ぬるに、この御子^{みこ}を召して、『われさるべきにやありけむ、こののをのこの家ゆかしくて、率^いて行けと言ひしかば率て来たり。いみじくここありよく覚ゆ。こののをのこ罪しれうぜられば、われはいかであれと。これも前^{さき}の世にこの国にあとを垂^たるべき宿世^{すくせ}こそありけめ。はや帰りて公にこの由^{よし}を奏せよ』と仰せられければ、言はむかたなくて、上りて、帝に、かくなんありつると奏しければ、『言ふかひなし。そののをのこを罪しても、今はこの宮を取り返し、都に返し奉るべきにもあらず。竹芝のをのこに、生けらむ世の限り、武蔵の国を預け取らせて、公事^{おうやけごと}もなさせじ』。ただ宮にその国を預け奉らせたたまふ由の宣旨下りにければ、この家を内裏のごとく造りて住ませ奉りける家を、宮など失せたまひにければ、寺になしたるを、竹芝寺といふなり。その宮の産みたまへる子どもは、やがて武蔵といふ姓を得てなむありける。それよりのち、火たき屋に女はゐるなり」と語る。

〈意訳〉

帝と后は、姫宮がおらっさんごてなったちゅてご心配になり、お捜しになられたところ、武蔵の国の衛士の男がとてもよか香りんするもんば首に引っ掛けて飛ぶごて逃げていったと申し出た者があって、この男ば捜したばって見つけることができんじゅった。間違いなく故郷に逃げたっじゃろうと、朝廷の使者が下って追うたりゃ、勢多の橋がうっくえて先に進めず、やっと三月めに武蔵の国に行き着いて、この男ば捜したりゃ、この姫宮が朝廷の使者を呼び寄せられ、『私はこうなる宿命だったのでしょか。この男の家が見とうして、私ば連れて行けと言ったもんだけん、こうしてやって来たっです。ここはたいそう住みよかて思います。もしこの男が処罰され、ひどい目に遭わさるっとなろば、私はどがんしたらよかっじゃろかい。これも前世にこの国に住みつくとこの因縁があったからこそです。早く都に帰って朝廷にこのことば奏上してください』とおっしゃいました。使者は何とも言いようがなうして、上京し、帝にしかじかかくかくと奏上したところ、帝は、『どうにも仕方がない。その男を処罰したところで、今となつては姫宮を取り戻して都に戻すこともできん。そんならば、竹芝の男に、生きてる限りずっと武蔵の国ば所領させ、税や賦役も免除することにしゅう』とおっしゃり、ただ姫宮にその国ばお預けするという旨の宣旨が下されたんです。男の家ば皇居のごて造り、姫宮ばお住ませなさったばって、その後、姫宮もお亡くなりになり、その家を寺にしてあったとば、竹芝寺というそうです。姫宮がお産みになったお子たちは、そのまま武蔵という姓ばもろうたそうです。こがんことがあったもんですから、その後は火たき屋には男ではなく女ば置くようになったそうです」と語った。

〈原文〉

【足柄山】

足柄山あしがらといふは、四、五日かねて、恐ろしげに暗がり渡れり。やうやう入り立つふもとのほどだに、空のけしき、はかばかしくも見えず。えもいはず茂り渡りて、いと恐ろしげなり。

ふもとに宿りたるに、月もなく暗き夜の、闇に惑ふやうなるに、遊女三人あそびめみたり、いづくよりともなくいで来たり。五十ばかりなるひとり、二十ばかりなる、十四、五なるとあり。庵の前にからかさをささせて据ゑたり。をのこども、火をともして見れば、昔、こはたと言ひけむが孫といふ。髪いと長く、額ひたいいとよくかかりて、色白くきたなげなくて、さてもありぬべき下仕しもづかへなどにてもありぬべしなど、人々あはれがるに、声すべて似るものなく、空に澄みのぼりてめでたく歌を歌ふ。人々いみじうあはれがりて、け近くて、人々もて興するに、「西国の遊女はえかからじ」など言ふを聞きて、「難波なにわわたりに比ぶれば」とめでたく歌ひたり。見る目のいときたなげなきに、声さへ似るものなく歌ひて、さばかり恐ろしげなる山中に立ちて行くを、人々飽かず思ひて皆泣くを、幼き心地には、ましてこの宿りを立たむことさへ飽かず覚ゆ。

まだ暁より足柄を越ゆ。まいて山の中の恐ろしげなること言はむかたなし。雲は足の下に踏まる。山の半らばかりの、木の下なかのわづかなるに、葵あおいのただ三筋ばかりあるを、世離れてかかる山中にしも生おひけむよと、人々あはれがる。水はその山みどころに三所ぞ流れたる。からうじて越えいでて、関山せきやまにとどまりぬ。これよりは駿河なり。横走よこはしりの関のかたはらに、岩壺いわつぼといふ所あり。えもいはず大きな石の、四方なる、中に穴のあきたる、中よりいづる水の、清く冷たきこと限りなし。

〈意識〉

足柄山というとは、四、五日前から、恐ろしかごて暗か道が続いとった。しだいに山に入り込むふもとの辺りですえ、空のようすがはっきり見えん。言いようがなかほど木々が茂り、ほんとうにおそろしかごたった。

ふもとに宿泊したところ、月もなか暗か夜で、暗闇に迷いそうになっとなったりや、遊女が三人、どこからともなく出てきた。五十歳くらいの一人と、二十歳くらいと十四、五歳くらいのがおった。仮小屋の前に唐傘ばささせて、その下に座らせた。男たちが火ばともして見ると、二十歳くらいの遊女は、昔、こはたとかいう名の知れた遊女の孫ち言う。髪がどもこも長く、額髪ひたいがたいそう美しう顔に垂れかかっとなつて、色は白くあかぬけしとるけん、このままでもかなりの下仕えとして都で通用するだろうなどと人々は感心した。すると、その遊女は、比べ物がなかくりゃの声で、空に澄み上がるごて見事に歌ば歌った。人々はとても感心し、その遊女ば身近に呼び寄せて、みんなでうち興じとなつたりや、誰かが、「西国の遊女はこがん上手にや歌えんどもん」と言えば、遊女がそりば聞いて、「難波の辺りの遊女に比べたらとても及びません」と、即興で見事に歌った。見た目がとてもあかぬけしとる上に、声までもが比べようがなかくりゃ上手く歌いながら、あれほど恐ろしげな山の中に立ち去って行くとば人々は名残惜しゅう思うて皆嘆いた。幼い私の心にや、それ以上にこの宿ば立ち去るのが名残惜しく思われた。

まだ夜が明けきらんうちから足柄ば越えた。ふもとにまして山中の恐ろしさというたりやなか。雲は足の下となる。山の中腹あたりの木の下なかの狭い場所に、葵がほんの三本

ぐりゃ生えとつとば見つけて、こが山の中によくまあ生えたもんだと人々が感心しとる。水はその山には三か所流れとつた。

やつのことで足柄山ば越え、関山に泊まった。ここからは駿河の国だ。横走の関のそばに岩壺という所がある。そこには何ともいいようがなかぐりゃ大きくて、四角で中に穴の開いた石があって、中から湧き出る水の清らかで冷たかことちゅうたら、この上もなかった。

〈原文〉

【富士の山】

富士の山はこの国なり。わが生ひいでし国にては西面に見えし山なり。その山のさま、いと世に見えぬさまなり。さま異なる山の姿の、紺青を塗りたるやうなるに、雪の消ゆる世もなく積もりたれば、色濃き衣に、白きあこめ着たらむやうに見えて、山の頂の少し平らぎたるより、煙は立ちのぼる。夕暮れは火の燃え立つも見ゆ。

清見が関は、片つ方は海なるに、関屋どもあまたありて、海までくぎぬきしたり。けぶりあふにやあらむ。清見が関の波も高くなりぬべし。おもしろきこと限りなし。田子の浦は波高くて、舟にてこぎ巡る。

大井川といふ渡りあり。水の、世の常ならず、すり粉などを、濃くて流したらむやうに、白き水、速く流れたり。

※ 煙 天草方言「けぶり」

〈意識〉

富士の山はこん国（駿河）にある。私が生まれ育った上総の国では西に見えた山だ。その山のさまは、まったく世の中に比類ない。他の山とは異なった姿で、紺青ば塗ったようなのに雪が消える時もなく積もっているのは、濃い紺青色の衣の上に白いあこめを着たように見えて、山の頂の少し平らな所から、煙が立ちのぼるとる。夕暮れには火が燃え立つとも見ゆる。

清見が関は、片方は海ばって、関屋がいっぴゃあり、海まで柵ば作ってある。潮煙が多く立とつとつとじゃろうかい、清見が関の波も高くなるにちがいなか。すばらしいことこの上なか。

田子の浦は波が高かったばって、舟でこいで巡った。

大井川という渡し場がある。川の水が世間並みでなく、すり粉などを濃く溶かして流したごて、白い水が速く流れとつた。

〈原文〉

【帰京】

粟津にとどまりて、師走の二日京に入る。暗く行き着くべくと、申の時ばかりに立ちて行けば、関近くなりて、山づらにかりそめなるきりかけといふものしたる上より、丈六の仏のいまだ荒造りにおはするが、顔ばかり見やられたり。あはれに、人離れて、いづこともなくておはする仏かなと、うち見やりて過ぎぬ。ここの国々を過ぎぬるに、駿

河の清見が関と、逢坂おうさかの関とばかりはなかりけり。いと暗くなりて、三条の宮の西なる所に着きぬ。

広々と荒れたる所の、過ぎ来つる山々にも劣らず、大きに恐ろしげなる深山木みやまぎどものやうにて、都の内とも見えぬ所のさまなり。ありもつかず、いみじうもの騒がしけれども、いつしかと思ひしことなれば、「物語求めて見せよ、物語求めて見せよ」と母を責むれば、三条の宮に、親族なる人の衛門えもんの命婦みょうぶとてさぶらひける尋ねて、文やりたれば、珍しがりて、喜びて、御前おまえのをおろしたるとて、わざとめでたき草子ども、硯すずりの箱ふたの蓋に入れておこせたり。うれしくいみじくて、夜昼これを見るよりうち始め、またまたも見まほしきに、ありもつかぬ都のほとりに、たれかは物語求め見する人のあらむ。

〈意識〉

栗津に泊まって、十二月の二日に京都に入った。暗うなって着くごとと、申の時ごろに出発して行くと、逢坂の関近くになって、山のそばにちょっとした切り懸け（板塀）は作ってある上から、一丈六尺の仏像が荒造りのままでいらっしゃり、顔だけ遠くに眺められた。いとおしくも、人里離れ、どこともなく落ち着かんようすでいらっしゃる仏様だなど眺めながら通り過ぎた。ここまで多くの国々ば過ぎて来たばって、駿河の清見が関と、逢坂の関ほどすばらしか所はなかった。だいぶん暗うなって、三条の宮様の御所の西にある我が家にたどり着いた。

広々と荒れとって、植木も今まで通ってきた山々にも劣らず、大きく恐ろしげな深山の木々のごて、都の中とは思えんありさまだ。まだ落ち着かず、あわただしかったばって、私は少しでも早く物語をば見たく思っていたけん、「物語ば捜して見せてよ、物語ば捜して見せてよ」と母にせがんだ。母は、三条の宮様に衛門の命婦としてお仕えしていた親類に宛てて手紙ば出し、その人は珍しがり喜うで、三条の宮様とばいただいたのだというて、格別にすばらしか草子のいくつかば硯の箱の蓋に入れてよこしてくれた。私はうれしくてたまらでにゃ、夜も昼もこれば見ることから始まって、さらにもっと見たいと思うものの、まだ落ち着きもせん都で、誰が捜して見せてくるっどうか。

〈原文〉

【継母との別れ】

継母まははなりし人は、宮仕へせしが下りしなれば、思ひしにあらぬことどもなどありて、世の中恨めしげにて、ほかに渡るとて、五つばかりなる乳児どもなどして、「あはれなりつる心のほとなむ、忘れむ世あるまじき」など言ひて、梅の木うめの、つま近くて、いと大きなるを、「これが花の咲かむをりは来むよ」と言ひおきて渡りぬるを、心のうちに恋しくあはれなりと思ひつつ、忍び音ねをのみ泣きて、その年も返りぬ。いつしか梅咲かなむ、来むとありしを、さやあると、目をかけて待ち渡るに、花も皆咲きぬれど、音もせず。思ひわびて、花を折りてやる。

頼めしをなほや待つべき霜枯れし梅をも春は忘れざりけり
と言ひやりたれば、あはれなることども書いて、

なほ頼め梅の立ち枝は契りおかぬ思ひのほかの人も訪ふなり

〈意訳〉

継母だった人は、もともと宮仕えばしとって、父の妻となって上総の国まで下ったので、思ってもおらんじゃったさまさまのことなどがあり、夫婦仲がしっくりいかんごてなって、離婚してよそに移ることになった。五歳ばかりの幼子ば連れて別れるとき、私に「これまでやさしくしてくれたあなたの気持ちば忘れる時はなかでしよう」と言って、家の軒先近くのなんさま大きか梅の木ばさして、「この花が咲く時はまた来るけんね」と言い残して行ってしもうた。私は、心の中で恋しく切なく思いながら、声を忍ばせて泣いてばかりいて、とうとうその年も暮れて新たな年ば迎えた。早く梅の花が咲いてほしか、そうしたら来ようと言うとったが、ほんとうにそうじゃろうかと、じっと見ながら待ち続けとったが、花がすっかり咲いても何の音沙汰もなか。とうとう思い余って、花ば折って歌ば添えて継母に送った。

〈当てにさせられたことは、なお待ち続けんばんとでしようか。霜枯れていた梅でさえ春を忘れず花を咲かせたち言うのに、お母様はお忘れになったのでしようか。〉

と送り送ったところ、継母からの情のこもったいろいろなことを書いた返事に、次のような歌が添えてあった。

〈まだ当てにして待っててください。梅の高う伸びた枝は古い歌にもあるごて、約束もしとらん思いがけなか人さえ訪ねて来てくれるということです。私もいつかはきっと。〉

（平兼盛の「わが宿の梅の立ち枝や見えつらむ思ひのほかにも君が来ませる」をふまえている）〉

〈原文〉

【物 語】

（一）

その春、世の中いみじう騒がしうて、松里の渡りの月影あはれに見し乳母も、三月一日に亡くなりぬ。せむかたなく思ひ嘆くに、物語のゆかしさもおぼえずなりぬ。いみじく泣き暮らして見出だしたれば、夕日のいと華やかに差したるに、桜の花残りなく散り乱る。

散る花もまた来む春は見もやせむやがて別れし人ぞ悲しき

また聞けば、侍従の大納言の御むすめ、亡くなりたまひぬなり。殿の中将の思し嘆くなるさま、わがものの悲しき折なれば、いみじくあはれなりと聞く。上り着きたりしとき、「これ手本にせよ」とて、この姫君の御手を取らせたりしを、「さ夜ふけて寝覚めざりせば」など書いて、「鳥辺山谷に煙の燃え立たばはかなく見えしわれと知らなむ」と、言ひ知らずをかしげに、めでたく書きたまへるを見て、いとど涙を添へまさる。

※ 松里の渡り：今の千葉県松戸市にあった渡し場。

※ 侍従の大納言：藤原行成。

※ 煙 天草方言「けぶり」

〈意訳〉

その年の春は、疫病が流行して世の中がひどく騒然とし、松里の渡し場での姿ば痛々しか思いで見た乳母も、三月一日に亡くなってしまった。どうしようもなく嘆いているうちに、物語ば読みたかという気持ちも感じなくなってしまった。激しく泣きながら過ごしていて、ふと外を眺むると、夕日がたいそう華やかに差している辺りに、桜の花が残りなく散り乱れとる。

＜散っていく花は、再びやってくる春には見ることもできんけん、恋しくてならん。＞

また聞くところによれば、侍従の大納言の姫君がお亡くなりになったちゅうた。夫君の殿の中将が嘆き悲しんでいらっしゃるごようすも、私自身が嘆き悲しんでいるときでもあったけん、まことにお気の毒なことと聞いた。京に着いたとき、父が「これば手本にきなさい」ち言うて、この姫君のご筆跡ば下さったばって、それには「さ夜ふけて寝覚めざりせば（夜が更けて目が覚めなかつたろば）」などと書いてあり、「もしも火葬場のある鳥辺山の谷から煙が立ったろば、前々から弱々しく見えていた私だと知ってください」と、何とも言えでにやすばらしく、みごとな筆跡で書かれている歌を見れば、いっそう涙をそそられる。

〈原文〉

（二）

かくのみ思ひくんじたるを、心も慰めむと、心苦しがりて、母、物語など求めて見せたまふに、げにおのづから慰みゆく。紫のゆかりを見て、続きの見まほしくおぼゆれど、人語らひなどもえせず。たれもいまだ都慣れぬほどにて、え見つけず。いみじく心もとなく、ゆかしくおぼゆるままに、「この源氏の物語、一の巻よりして、皆見せたまへ」と、心の内に祈る。親の太秦にこもりたまへるにも、異事なく、このことを申して、出でむままにこの物語見果てむと思へど、見えぬ。いと口惜しく思ひ嘆かるるに、をばなる人の田舎より上りたる所に渡いたれば、「いとうつくしう生ひなりにけり」など、あはれがり、めづらしがりて、帰るに、「何をか奉らむ。まめまめしき物はまさなかりかむ。ゆかしくしたまふなる物を奉らむ」とて、源氏の五十余巻、櫃に入りながら、在中将・とほぎみ・せり河・しらら・あさうづなどいふ物語ども、ひと袋取り入れて、得て帰る心地のうれしさぞいみじきや。

はしるはしるわづかに見つつ、心も得ず、心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人も交じらず、几帳の内にうち伏して、引き出でつつ見る心地、後の位も何にかはせむ。昼は日暮らし、夜は目の覚めたる限り、灯を近くともして、これを見るよりほかのことなければ、おのづからなどは、そらにおぼえ浮かぶを、いみじきことに思ふに、夢に、いと清げなる僧の、黄なる地の袈裟着たるが来て、「法華経五の巻を、とく習へ」と言ふと見れど、人にも語らず、習はむとも思ひかけず。物語のことをのみ心にしめて、われはこのごろわろきぞかし、盛りにならば、かたちも限りなくよく、髪もいみじく長くなりなむ、光の源氏の夕顔、宇治の大將の浮舟の女君のやうにこそあらめと思ひける心、まづいとはかなく、あさまし。

〈意識〉

私がこがんずっとふさぎ込んでいるので、気持ちば慰めようと心配して、母が、物語などをさがして見せてくださり、なるほど気持ちが自然と晴れていく。『源氏物語』の紫上についての巻ば読み、続きが読みたく思われるばって、誰にも相談することもできん。家の者はだれもまだ都に慣れとらん時だったけん、物語ば見つけ出すこともできん。とてももどかしく、読みたくてたまらんけん、「この『源氏物語』を一の巻からみなお見せください」と心の中で祈る。親が太秦に参籠なさる際も、他の事はお願いせず、ただ物語のことばかりばお願いして、寺から出てきたらすぐにこの物語ば終わりまで読んでしまおうと思っているのに、かなえられん。とても悔しくて嘆かわしか気持ちでいると、おばに当たる人が田舎から上京してきたところに母が私ば差し向け、おばが、「たいそう可愛らしく成長さしたね」などと懐かしがったり珍しがったりして、帰りがけに、「何ば差し上げよう。実的な物ではつまらんでしょう。欲しがっていると伺っている物ば差し上げましょう」と言って、源氏の五十余巻を櫃に入れたまま全部と、在中将・とほぎみ・せり河・しらら・あさうづなどの物語ば一袋に入れてくださった。それをいただいて帰るときのうれしさというたら、どう言い表したらよかか分からん。

これまで胸ばどきどきさせながら、ところどころだけ拾い読みしては納得いかんで、じれったく思うていた『源氏物語』ば、最初の巻から読み始めて、だれにもじゃまされず几帳の中に横になり、次々に読んでいく気持ちは、後の位も問題にならないほどだ。昼は一日中、夜は目が覚めている間じゅう、灯を近くにともして、これば読む以外何もせんで過ごしているけん、しぜんに頭の中にそらでも文句が浮かんでくるようになったとばうれしく思っていると、夢の中に清浄な感じの僧侶が黄色い地の袈裟ば着て出てきて、「法華経の五の巻を早く習いなさい」と言うた夢ば見た。しかし、これを誰にも話さず、法華経を習おうという気持ちになれん。物語のことで頭がいっぱいで、私は今はまだ器量はよくなか、ばって年ごろになったら顔立ちも限りなくよくなり、髪もすばらしく長く伸びるに違いなか、きっと光源氏にあされた夕顔、宇治の大将の恋人の浮舟の女君のごてなるはずだわ、と思っていた私の心は、何とも他愛なく、とてもあきれ果てたものだった。

 [トップページへ戻る](#)